

なぜ「子どもと文化」か。それは熊野論文もいうように、子どもという「他者」の視点を導入することが、日常生活の中で半ば自明のものと化している《文化》を改めて問いなおそうとする際に有効な方法となるからである。こうした問題設定のもとで本特集には、専門分野を異にする三人の先生からそれぞれ力のこもった作品をいただくことができた。熊野論文は、山田洋子氏の「記念碑的労作」の紹介を通じて「おとなの言語体系を『カッコ』に入れ……スタンダードな言語観を相対化してゆく」方向性を指し示してくれており、子どものことばをとらえなおしてゆく作業を「光源」として《ことば》という文化を照らし出すことを試みている。喜山論文は、嫡出関係（表の文化だ）のみを親族体系の基礎と考えてきた従来の発想を反省して、「庶出子」（「遊びの子」という意味の民俗用語が沖繩にあることは興味深い）の帰属の問題を視野に組みこもうとしており、いわば（庶出子という）裏の文化の視点から《家族》という文化のとらえかえしを行っている。須藤論文は、世界システム論をふまえて現代を「移行期」として位置づけた上で、そこに発生している科学技術のさまざまな問題点を浮き彫りにしている。子どもの誕生にまで科学技術の関与が可能となり、私たちの科学の成果と負担（核廃棄物をみよ）が丸ごと子どもたちの将来の環境になっていこうとしている現在、《科学技術》のあり方に対する問いを抜きにして「子どもと文化」を論じられないことを須藤論文は教えてくれる。

この特集を企画・編集するにあたって、念頭においていたことが三つある。その一つは——「おとなはふたたび子どもになることはできず、もしできるとすれば子どもじみらくらいがおちである。しかし子どもの無邪気さかそれを喜ばさないであろうか、そして自分の真実さをもう一度つくっていくために、もっと高い段階でみずからもう一度努力してはならないであろうか。子どものような性質のひとにはどんな年代においても、かれの本来の性格がその自然のままの真実さでよみがえらないだろうか」（K・マルクス『経済学批判』岩波文庫、三二八―九頁）。もう一つは絵本作家M・センダックのことば——「わたしは、子どもだったわたしは、成長して現在のわたしになったとは信じていないのです。彼は、わたしのために……未だどこかに存在しているのです。わたしは、彼のために……未だどこかに存在しているのです。わたしは、彼が非常に気にかかりますし、非常に興味をもっています。彼といつでも通じようとしています。わたしは、彼も恐れることの一つは、彼との接触を失うことです」（セルマ・G・レインズ『センダックの世界』岩波書店、二六頁）。最後の一つは——「まことに汝らに告ぐ。心を改めて幼な子のようにならなければ、天国に入ることとはできない」（マタイ伝一八章三節、田川建三訳）。マルクスが勧めた努力、センダックが求めた接触、イエスが説いた回心、そのそれぞれが「子どもと文化」への問いかけを私たちに促しているように思われてならない。